

集中豪雨

1971. 10

三重県 尾鷲市立 賀田小学校 4年文集

忘れ得ぬ九月十日

九月十日、わたしたちが今まで想像もしなかったおそろしいことがおこりました。

あの日は前日から降り続いてやむことをしらない雨がますますはげしくなり、五限目の音楽の途中、みなさんは家へ帰りました。

みんなが帰ったあと、わたしは少しでも仕事をしようと思って、職員室で本を広げましたが、「これでもか、これでもか」というように地面をはげしくたたきつける雨、刻一刻と水かさを増しつつ、ごうごう ごろごろのものすごい音をたてて流れるおこだに川の音が耳から離れず、いいしれぬ不安と恐ろしさに仕事をする気力も無く、ただ何するともなく、四、五人の先生方と雨が小降りになることのみを念じつつ時を過ごしました。

けれども、雨は時間と共にますますはげしさを増し、“このまま学校にいては”と思ったので、四時前にあやうく足をとられそうになりながら家路につきました。

ちょうどありよし屋の前までいったとき、(四時頃でした)おこだに川がはんらんし、どす黒い泥水が商店街へ流れ出しました。

消防団の人達が、その危険をあたりの人々に大声で知らせているのを見たとき、何とも言えぬおそろしさに足のすくむ思いがしました。

堤防のところから車に便乗させていただき、古江小学校の下までいったとき、運動場から真黒の泥水が滝のようになって下の国道へ落ち、また、家と家の間からも泥水がわき出たように、ものすごい勢いで流れ出してきました。

そして、泣き出しそうな顔をし、頭からびしょぬれになって走ってくる女の人、小さい子をだいて必死に逃げてくる男の人の姿を見、一瞬何かただならぬ事がおこったという予感しました。

あとでわかったのですが、その時ちょうど、古江小学校の上の方で山津波がおこり、家がつぶされ、死者も十三人も出たのでした。

このような状態の中で、三木里まで車でいけないのはもちろん、歩いていくことも危険なので、わたしはまた賀田まで引き返しましたが、堤防までくると、農協の前の道はまるでどぶ川のように、でも水の勢いは強く、ごうごうと、農協の前の道はまるでどぶ川のように、でも水の勢いは強く、ごうごうと流れていて通る道がないのです。しかたなく、水門の上の堤防伝いに農協の倉庫までいき、途中でかいちゅう電燈をかきりて中学校へ行きました。中学校にも三木里から通勤している先生がおられるので、

その先生といっしょにトンネルを歩いて帰ろうと思ったからです。

雨は、まだまだはげしく降っておりましたが、賀田ではまだ山津波はおこっておらず、西の方の家々はみんな静かに雨戸をとざしていました。

中学校を出て、トンネル口を歩き出したのが、五時四十分——五時四十五分に三木里がわのトンネルを出るまで何も知らずに歩いたのですが、その頃賀田では山津波がおこり、みんなが、大きわぎをしていたのです。

このことを、夜おそくなってテレビで知り、一ばんに心配したのは すえかさんと孝志くんのことでした。ちょうど、テレビにうつった写真のあたりに家のあるのが二人なので……。

賀田始まって以来のこの大惨事に十三人もの尊い命がうばわれ、その中にみんなのお友達、一年のまさき君、五年のあかしちゃんが入っていたことはほんとうに悲しいことです。

でも、もういくら泣いても悲しんでも二人は帰ってきてくれません。今はせめて、この二人がお母さんと共に天国で安らかに眠って下さるようお願いしましょう。

四年生のお友達は、さいわい、けがをした人もありませんでしたが、すえかちゃんの家は土砂に押し流され、今は不自由な生活ですが、でもすえかちゃんはその苦しさに負けず元気ががんばっています。また、敏行君の家も流されはしませんでした、ひどくやられましたし、隆盛君、英明君、耕太郎君、康久君、ちほみちゃんの家も泥水で大変な被害を受けましたが、そのつらさにもじっと耐えてがんばってくれていますのでほんとうにうれしく思います。

学校もひどくやられましたが、みんなが汗を流して植え、楽しみにしていたさつまいもだけは、被害を受けずにすくすく育ち、大きな実をつけて、みんなを喜ばせてくれましたね。

学校の行き帰り、山肌をあらわに出したあの大きな爪跡を見ていると、思わず寒気がし、二度とこの町にこのような災害がおこらないよういわずにはおられません。

この文集は、あの“おそろしかった日”の記録ですが、いつまでもいやな思い出として残さず、一つの教訓としてうけとめ、いつか笑って読み返す日の来ることを念じています。

昭和四十六年十月

四年担当

野地 子

もうしぬと思った

大川 けんし

九月十日に土砂くずれがありました。
ぼくは十日の日はかぜをひいて学校をやすんでいました。
びょういんからかえってうちへついたとき雨がだんだんはげしくふってきました。
これだけはげしくふったら学校も水でつかるとは思いませんでした。
そして電気も停電したし「山のかみさんの方がくずれた。」とおとうさんがかえってきてびっくりしました。
そしてカーバイトをつけたりしていました。
それからはんしょうがなりました。
そのうちがっこうからくるはしがうまっていつてはねへいけなくなりました。
「???? (字消え) 方から大きい声で二、三げん家が流れたぞ」とおめいてきました、それでぼくはびっくりしました。
おとうさんからきいたはなしだと、十三人ぐらいゆくえふめいだといいました。
そしてとなりの人たちがぼくの家のにげてきました。
となりのおじさんは「しんせきの人がゆくえふめいになっているそうだ」とはなしとおばあちゃんはかなしそうにしていました。
そしておばあちゃんとおじちゃんはまた西へいきました。
中学二年生の人と小学五年生の方はぼくの家におりました。
????? (字消え) ふとんの中にはいつてトランプをして遊んだ、そのとき西の方のおばちゃんが「たすけてくれ」と石と石のあいだからさけんでいたそうですが、ぼくたちはなんにもしらなかった、しばらくしておじさんとおばさんがきてうちへかえっていきました。
そのときかみなりがゴロゴロとなってきました。
おとうさんもおかあさんもねていました、ぼくはびくびくしてねないでおきていた。
すると十一時ごろ車の方の山が「ゴー」と音がしたのでおとうさんとおかあさんをおこして、ながいカップをきてにげました。
そしてばあちゃんとかへにげていったときよみこちゃんとおじちゃんがき「もうちょうと西へにげた方がよい。」といったのでとなりのうちへしにものぐらいでにげました。
そのときぜんしおじちゃんとかはいえはどうなつとるかなとおもいました。
雨もやんでほしが空いっぱいだったのであんしんしました。
うちへかえってみると、えきの方もくずれているし、ぼくのいえの方もくずれていました。エキノコックス

山津波 九月十日

大川 すえか

学校からかえるとちゅうで、どぶのところがあふれていました。

うちについてから、ずーっとそとを見ていました。

家の中にはいって行って、お人形とあそんでいたら、ゴーッという音がしたのでおかあさんが「いさほうをみてみよ」といったので、うらを見に行きました。

「うらがたきのように、水がでてきた」といいました。

するとだんだん音が近くなってきたので、おかあさんが「そらでよー」といったのでみんなくつをはかんと、とんででました。

わたしはくつをはいていたので、一ばんおそかった。

なやまできたとき、えりこちゃんと、みどりちゃんと、おばちゃんが、たけちゃんをだいて、わたしとこのなやまできたので「ここやったらあぶないさか、のぼうおじちゃんのとこいこらい」と、おかあさんがいったので、寺を走っていきました。

寺のかいだんでみどりちゃんが三かいすべった、なな子さんも一かいすべった。

えりこちゃんとこのおばちゃんが、たけちゃんをだいていたのでつまずいてこけました。

のぼうおじちゃんとかへきてオーバーやジャンパーやなにか、かしてもらいました。

ねているとき、みみをまくらにすると、ゴーとゆう音がまだきこえました。

あさになったので、ぬれているふくをきて家にいきました。

みよこねえちゃんも四日市からきて、びっくりし頭がいたくなってきたので、ぬせバあちゃんのところでやすみました。

わたしは、えりこちゃんのとこでとまってねているときでも、まだあのときのことかわすれられませんでした。

米をそとがわにだして、西がわのほうに家をたて、ましみつにいちちゃんや、ひろよったんやきんちゃんらが、らがたんすや、ふとんや、おかつてのものをもってきてくれたので、よるはなやがひろくなったので、ねています。 おわり

おそろしかった

森岡 英之

九月十日の五時間めに、音楽をしていました。

そしたら、先生が、

「川があふれてきよるのでうちへ帰る。」

といたので、かばんにどうぐを入れてうちへ行くとき、運動場は、5 c mぐらい水がはっていました。

うちへ帰ってから、かばんをふきよったら、よこのおじちゃんが、「東は、ものすごかった。」

といてきました。

5時ごろ「西がぐえたぞ。」

とおめいてきたのでぼくは、ふるえかかってきました。

たかし君とひであき君とひろみちゃんがにげてきました。

ぼくは、西がぐえたので、たかし君はけがをしたか土にうまったかと思ってどきどきしました。

ねるときは、おそろしくてねむれませんでした。

朝、西へいったら、あたらしい家がいがんでいました。

じえいたいの人らがほっているのを見るとかなしくなってきました。

いたいが見つかったときよかったなあと思いました。

下のきょうしつはどろだらけでした。

10月10日の日にあんな大雨がふらなんだらしんだりしなかったのと思う。

大雨の一日

四年 唐沢 直通

九月十日、十七時ごろ 賀田の方でかみなりのなるような音がしました。

うちのまどから見たとき見えませんでした。

川の方を見たとき川の水が

「ぼこぼこ。」

と音をたてていました。

ゆか上しんすいがおこるかもわからないので三人でいっしょにかたづけました。

カラーテレビやたたみなどを二階にあげました。

二十三時ごろまた賀田の方でかみなりのような音がしました。

あくる日賀田へ行ってみるとじえいたいの人があせを流していそがしように死体を見つけていた。

学校の方へ行くとき道が川のようになって歩きにくかった、学校についたとき運動場が少しなくなっていた。

しょくいん室は電話や本などは外に出ていた、ぼくたちの上ばきもありませんでした。

一階のきょう室などはどろにつかっていた。

こんな、ことは三重県南部の地上最大の山津波とおもいます。

ものすごくおそろしかった山津波

大川 利子

9月十日、学校を早くかえらせてもらってうちにいました。

うちに帰ってからトレパンと長そでの服をきてテレビをみていたらおかあさんが、「四チャンネルにしてみよ。」と言ったので、わたしは四チャンネルにしたら、集中豪雨のことを話していました。

雨のことを話していました、するとおかあさんが、「にげやなあかな。」と言って、わたしに「にもつをちゃんとせ。」と言っておかあさんも、きちんとしていたので、わたしもきちんとして、そして車のにげていきました。

おかあさんがきてべんとうをたべていたら、中学三年の人が、「家がくずれたじ。」と言ってきました。

わたしは、うそだと思いましたが、ゴーゴーとゆうおとがしたのでみにいきました。そしたらほんとうにくずれていました。

そして、「おそろしな、おそろしな。」と話していました。

ちょっとたってねむくなったので、ねようと思いましたが、やかましくてねむれません、だからさおりとなにかしていました。

そしたらおかあさんが、「やかましいさかだまっとれ。」と言ってきました、わたしともうとは「けちんぼ。」と言ってねました。

雨はいつまでたってもやみません、わたしは、おそろしくておそろしくてたまりません。

おかあさんがもうじきやむやろ言ってくれたので、あまりおそろしくありませんでした。

でも、一つだけしんばいなことがありました。

それは、自分の家がくずれているか、いないかです。

中学校の二かいからわたしの家がみえません。

おとうさんは、くずれた家の人をさがしにっていたそうです。

おとうさんは、どろだらけで、きがえてからうちをみにいったら「どうもなかった。」と言っていたので安心してねました。

おきるとほしが三つでていました、時間は三じころでした、雨はやんでしずかでした。

それからにもつをかためてお母さんとともとうとわたしと話しながら歩いていきました。

中学校へ逃げたときは車でにげたけど、帰るときは、車が通らなかったのいでやでした。

だけど、家がくずれているのをみたときに、とてもおそろしかったです。「こんな、おそろしい集中豪雨は、二度とこないほうがいいな、けどまたくるかもわからないな」と思います。

そして、すえかちゃんがびしゃがれてないかしんばいしていました。でもそのつぎの日に、すえかちゃんたちはどこかへにげたと話していたのでよかったです。

大雨

大川 しょうご

九月十日

ゆうがたみずがこしてきよたもんでまさしがにげてきた。
そのあとひろきにいちやんがきた。
そのあと十人ぐらいきた。
そして夕飯を食べた
そしてうらのうちへ男だけでいて半分にわかれた。
そしてあっちにいてとらんぷをした。
そしてねよともてもねれないのであそんでいた。
あそんでいるうちにねむたくなってきたのでねよとおもたら
やまつなみが山のほうからきこえてきたのでねた。
西のほうからもきこえてきた。
少しおそろしかったのでぼくはねた。

山津波

原田 ちあき

わたしたちが学校から帰る時、一つだけくずれていました。
そして家へ帰って、わたしとこのまえをみたら山水がでていました。
はじめあまりにごつていなかったけれども、あとからみたらにごりこんでいました。
そしてわたしたちは、ごはんをたべて、にげるよういをしていたら、おとうさんが、「中学校へにげよ。」といて車にのせてもらっていたので、おかあさんとひでみとみきとのせてもらいました。
おくのひとの車がきて、わたしたちがのっていたら、「中学校へ、ようつれていか

ん。」いったのでおくの人とこの家におりました。

そして、おくの人があかちゃんをねかしよったら、ちょっと前に、すこしはなれたところで、ごろごろという音がしたので、わたしたちはびっくりしてながぐつをはいてそとへぬれていきました。

そしたら山がくずれていて、わたしたちは車で中学校へ行って、にかいへあがってわたしとねえちゃんはずぶくただったので、きがえました。

そして、ねむたないもんで12時ごろまでおきとりました。

そして朝になって家に帰るとき、よこのたんぼをみたら、川みたいになっていました。

そして家へ帰ってみたら、たくさんくずれていました。

帰っていろいろな、くずれているところをみました。

おそろしかった集中豪雨

中野 通伸

九月十日の音楽の時間に、奥の人たちを、むかえにきてくれたので、ぼくたちもかえしてくれました。

運動場をあるいているときながぐつの中に水がはいつてきそうでした。

うちに帰ってテレビを見ていたら停電になりました、テレビをけしてからたこやきをやきました、そのときは停電なのでろうそくをつけました。

たこやきをたべよったらはんしょうがなりだしたので、すぐ上にのぼってぼうえんきょうでみたら道はおとなの人のひざぐらいまで水につかっていたいました。

下へいったたこやきをたべましたがおちついてたべれません、おとうさんがみにいってくれたけどまだどきどきしています。

おとうさんがかえってきて「まだだいじょうぶ」といいました。

たべてから、おじいさんのいはみやみそやいんかんなど二階へ上げました。

がけがくずれるかとしんぱいしましたけれどだいじょうぶでした。

よけいに雨がつよくなったのでがけにはしごをかけて岡田先生とこへにげました。

うちがつかってきかいがだめになるかとしんぱいでした。

たけのやはうちのなかまで水がはいつたと思いました。

かいだんをのぼるときうしわら先生に会いました。

岡田先生とこについたとき、おかあさんがにもつをもってきてくれました。

ぼくは、おなかがへったのでかっぱえびせんをたべました、お茶をのんでいたら「ドドド」という音がきこえました。

岡田先生とこへ人がきて「けがをしたひとがきた。」といいました。

あとから「さっきの人こどもがゆくえ不明になった。」といったので「はやくみつかってほしいな。」と思って上にあがってねました。

けどゴーゴーという音でねむれませんでした。

よく日うちにかえってうちの中をみたら、たたみも機械も大丈夫だったのでほんとうにうれしかったです。 おわり

おおあめ

中川 せいじ

おおあめがふりました。

ぼくはおそろしかったです。

山津波

えのもと としゆき

いえにかえるとちゅうで川の水があふれよった。

うちにかえってがっこうのどうぐをかばんにいれてたかいところにおいた。

そしてにわをみたら水が入っていた。

おかあさんがきて「じてんしゃをあげたよ。」というたもんでじてんしゃをあげた。

ごはんをたべているとしんせきのおじちゃんが「はよあがってこい。」というたもんでねににげました。

そしておばちゃんとおじちゃんとおかあさんとぼくとねた。

朝おきてうちをみたらうらのみちがうまっていた、うらの木もながれていた。

すずきのまえにいったらどしゃがいっぱいあった。

そして上のほうへいったらそこにあったはしはなかった。

がっこうをみたらうんどうじょうにあるべんじよのまえはほれてみずがたまって池のようになっていた。

おそろしかった。

二どとこんなことがないようにしてほしい。

おそろしかった九月十日の集中豪雨

久米 幸子

十日の日は、音楽を少しして運動場へ出たら、おかあさんがむかえにきていたので、

おかあさんと家にかえった。

家の横のどぶが道にあふれだしてきていた、家の横のどぶに大きな石がごとごとと
いって流れてきていた。

ごはんをすぐたべた、それから少したって、ゴーとものすごい大きな音がしたので、
わたしは汽車がとおったのかなと思った。

おかあさんが、「汽車は、大雨やのにとおってないやろ。」といった。

そして外を見ておとなの人が走り出したので、おとうさんが、「どしたん」と
聞いたら、「山くずれだぞ」と、どこそのおじちゃんがいったので、おとうさんも
かっぱをきて、上のほうへいった。

おとうさんは少ししてきた。

おとうさんは、「上のほうが、だいぶやられとる」といったので、わたしは家が土
砂でくずれていると思った。と言われても

それから「ひなんしろ」とだれかがいったので、
わたしたちはびしょびしょになって、長岡のおじちゃんの家になげた。

にげていくとちゅうは、道に水がたくさん流れてきたので、長ぐつの中にはいった。

雨は、いつまでたってもやまなかった。

わたしは、大雨がふるのでねなかった。

雨が少しやむと、おこだに川の水の音がきこえてきました。

五時ごろから、わたしはおきて外をみたら、でんしんばしらがかたむいているので、
きのうの山くずれはものすごかったと思った。

五時半ごろから、ヘリコプターやひこうきが、なんだいもひがいをうけたところを
うつしていた。

下の方の家は、水につかって、あとかたづけにたいへんだと思う。

「こんど、大雨がふってきたら、山にひびがいつとんで、また山がくずれてくる
かもわからんね」

と上のおじちゃんがいったので、いやだとおもった。

集中豪雨

正木 英明

九月十日、ぼくたちが勉強をしていたら、わかばやし先生が、なかおくの人を、水
がえらなってきたもんで呼びにきました。

そして、ぼくたちもかえりました。

ぼくたちがかえるときは、おこだにがわは、あまり水はえらいことはなかったけど、
うちにかえってちょっとたったら、うちの中に水が入ってきたので、ぼくがせんめん

きでとりよったら、おかあさんがきたので、たたみをあげました。

ふとんもあげこみました。

それからおかあさんといっしょにきいぼうにいちゃんどこにげました。

すこしたったらでんしんばしらがうごいていました。

ぼくがいえのなかにはいったら、男の人がうえのほうへにげよといったので上の方へにげました。

ひでゆきくんとこへにげてから、おとうさんがしんぱいしました。

一時間くらいたったらおとうさんがきたのであんしんしました。

家やなにかがながされたときいたのでびっくりしました。

すこしたってからねました。

紀州をおそった集中豪雨

上岡 義典

九月十日の午後四時ごろ、賀田小学校の横の川がはんらんして農協の前の道は、川みたいに水がザーザーと流れ出しました。

ぼくは、かばんに本、ノート、筆入れ等を入れて、おかあさんといっしょに駅へにげました。

駅へ着くと、駅の人たちは、中学校の横のところがくずれて二十けんもの家がくずれたと言っていました。

ぼくはそれを聞いて家がくずれた家の人にはこわかったらうなあと思いました。

六時ごろおとうさんが駅へ来ました。

おとうさんは「中学校もあぶないかもしれない。」と言いました。

それからぼくとおかあさんは、バスの中へ入りましたが、おとうさんだけは「家のようすをみにいく。」と言って行きました。

しばらくしてから、いなびかりが

ピカ ピカ—————

ピカ ピカ—————

と光りました。

午後十一時ごろ、ゴ—ゴゴゴゴ—というすごい音をたてて山津波がおこりました、ぼくはびっくりしました。

満潮になったとき、川の近くなので家が流されるかと思いました。

おとうさんが来て「床下がつかっていた。」と言いました。

そのときぼくは下においてあったくつはだめだらうなあと思いました。

午前三時ごろ家へ帰りましたが、水の流れるのは見えなかったけど、ザーザーとい

うすごい音がしていました。

あくる日、町のようなすを見てみると、くずれた所は大きな石があるし、農協の前は水が流れて川のようなだし、学校はどろが入って一階はめっちゃめっちゃになっていました。

そして中学校の横のくずれた所はもう少しで石がくる所や橋がこわれている所や車のガラスのわれている所がいろいろありました。

そして死んだ人や生きうめになった人をじえいたいの人がさがしました。

ぼくは土砂くずれがにくいと思います。

大雨のこと

東 かやこ

九月十日

学校からかえって、わたしはばあちゃんところに行きました。

ふみ子は、まだばあちゃんところにきてなかったので、ばちゃんといっしょにむかえにいきよったら、まことくんが「五年生の人と、上のみちからきいよる。」と、おしえてくれました。それで、ばあちゃんはじげへかしんをかいに行きました。

わたしはまた、もどって上のみちのほうへ行きました、そしたらふみこが、五年生の人といっしょに上のみちからきいよった。

かえりながら、わたしとこの家の方を見たらちかくの山がくずれていました、わたしはびっくりしました。

そしてばあちゃんところへ行くと、ばあちゃんもかえってきました、おかあさんも二時ごろかえってきました。

おかあさんがかえってきたので、うちにかえり、せと君のいえの方をみたら、もうせと君のよこのたんぼは、水がふえてきて、せと君の家もつかっていました。

わたしが「にげよらい。」といったら、おかあさんが「まあまてよ、ばあちゃんがにげたらにげよか。」といいました。

そしてばあちゃんがにげたのでおかあさんが「あんしんした。」と言いました。

わたしたちは、ばあちゃんがよびにきたので、山のかみさまのところに逃げました、きよこちゃんらもいました。

川の水がすごくなってきて、音もすごくなったので、わたしは、おそろしくなってきました。そして、中学校ににげました。

中学校ににげても山のかみさまにいたように、おそろしかったです。

じいちゃんらがまだ中学校に来ていないので、おかあさんがじいちゃんらをよびにいきました。

わたしとこのじいちゃんは来たけど、きよこちゃんこのじいちゃんは、まだきていませんでした。

中学校にいた人は、山がくずれて人が死んだり家がこわれたことを話していました。
死んだ人や、家がこわれた人はかわいそうだと思います。

九月十日三重南部をおそった集中豪雨

若林 ただし

音楽の時間がはじまった。

だが、雨がよくふるのですぐおわった。

家に帰ると中の階段は、流れてくる水のすごい力でおしかえしてくる。

だがぼくは負けずに登った。セメントの石だんを登りおわってから安心して校長先生の下
の階段をみると、またすごい水のていこうだ。

そこをのぼって行くとようやく家についた。

ぼくは、ほっとした。

長ぐつをぬいでから、かいちゅう電ちとまめ電きゅうとソケットをよういした。

雨はものすごい勢いでふりつづいている。

一段と強くふっているように思える。

学校からとうちゃんがふろしきをとりにきた。

「ふろしきとってくれ、書るいとってくる。」と言っていた。

ぼくは、二階から学校を見ていた。

そしたら学校を見たら水が川からあふれだしてきた。

ぼくは「父ちゃん学校のほうに水があふれだしてきたよ。」とおしえてやると、
父ちゃんが、「ほんとうか、ふろしきはええ、今日は学校でとまるかもわからん。」

と言って、学校へすつとんで行った。

母ちゃんがかっぱを着ていたのでぼくが「どこへ行くん。」ときいたら、
母ちゃんが「しゃんやへ電ちとローソクを買いに行くさかな。」と言った。

ぼくは、とうちゃんのことを心配でならなかった、その時は五時前でした。

二階に上がってそうがんきょうで見ていた、川の水は、どんどんふえてきた。

道のしたにある小さなマツの木の上に水がかかってきて水におしながされた。

そしてごみやドラム缶もながされた。

かあちゃんが、ローソクと電池を12こかって帰ってきた。

かとりせんこうをのせるかんかんのふたにローソクをのせて火をつけた。

もう一本にも火をつけた。

二階に上って学校のほうを見たら、飛び箱やマットが流れていった。

不思議に「アアアアア。」と自然に声が出てしまった。

ぼくは心の中で「くそ、低きあつめ。」とつぶやいた。今度はバックネットと、つ

くえと、ふみ台が流れて川の中に落ちてしまった。

また古いセフティーマットが一つ、イス、つくえ、とびぼこの一だんと四だん、ボール二こ、バット一本、ソフトボール一こ、マット一つ、そのほか川に落ちた。

新しいセフティーマットが流れて行く。

「アアアア。」「くそ低きあつめ。」となん回もくりかえして言った。

しばらくぼんやり立っていた、すると父ちゃんが帰ってきた。

ぼくは下にころげるように階段を下りて行った。

父ちゃんのかっぱはびしょぬれでした、ぼくが「どしたん。」と言うと父ちゃんが「書るいを理科室の高い所へおいとったんやけど水がえらいもんで、二階へもって行こうとしたら、すべって流され、ピンポン台でつまり、書るいを二階へもって行って足洗い場の所の石がきをはい上って家にきたんやぞ。」と言った。

かあちゃんが、「あかしちゃんら生きうめで死んだとか言いよったよ。」と言った。

それから家族でごはんを食べた。父ちゃんがかっぱをきていたので、ぼくは「どこへ行くん。」と言うと「のう道へくずれてきやへんか見まわりに行ってくるわよ。」と言って出て行った。

それからかあちゃんがふとんをしいてくれた、ぼくはねる気がないのでふとんの中でごろごろしていた。

とうちゃんが帰ってきた、とうちゃんが、「くずれてくるような所はないけど一か所だけ水が流れてきいよる。」という、かあちゃんが、「おそろしいから国子おばちゃんそこへにげるわい。」と言った。

かあちゃんが、タオルケットを二まいかっぱの下のはらとしりに入れた、そして下着を持った。

みんなゴムぞうりをはいていった、細道の所の水の流れは、早くてぼくは手をひっぱってもらった。

どうにかおばちゃんの家についた、そこのおじちゃんは「今まで十五人ぐらい死んだるで。」と教えてくれた。

ぼくはおそろしくてたまりませんでした、聞きたくないので早くねました。

山つなみ

宮田 法子

学校からおったら大雨がふってきたのであわてて学校をとびだした。

学校のかえり道に、ものすごく雨がふっていたので服がぬれてしまったので、早く家にかえってねまきとかえてねていると、下からも上からも

「つなみやどう。」「山つなみやどう。」とおめえてきました。

それでびっくりしてとびおきて、服ときがえて谷合ににげました。

そのときは、どこににげるかわからなくなりました。

どこへにげるのかわからなくなったとき、となりのじいちゃんが、かじやんの所へ行ったらだいじょうぶだと言ったので、かじやんという人の所へにげていきました。

かじやんという人の所へ行ってもおちつきませんでした、私はすこしねれたけれど姉ちゃんは、にかいのまどから外ばかりをみておちついていませんでした、姉ちゃんは朝までおきとった。

朝になると、下の方でたすけてくれと言ったのでびっくりしました、でも、それは木をあげていたのです、あとですうっとしました。

大雨

大川 秀和

九月十日

ザーザーとすごい大雨だ、ぼくが家の近くに出ていたら、おばさんたちが「一けんながれたぞ、二けんながれたぞ、三けんながれたぞ。」と大声で言った、ぼくは大げさすぎると思った。

それからすこしたったら、大声で「にげろ。」ときけんでくれた、ぼくはその声をきいて上だけはだかのまま、はだしで上のほうへはしっていった。

たにあいのほうへついたらシャワーをかぶったようにずぶぬれだった、そして「上のうちへにげろ」とおかあがいった。

けど、あとから「ビクターのほうへにげろ。」といってくれた。

ぼくらは、ただかず君ところのほうへいった。

いきうめになっている人のことを思ったら本当にかわいそうだとつくづく思う。

それから少しあそんでねた。

朝おきたらぼくが一ばんけつだった。

上はけいとで、下はばんつだったのでかっこわるかった、それから行ってきがえて、じこげんばへ行った。

水がいで家がつかった人もいる。

川の水が出てきて道が川になったり、かたはもうこちゃこちゃになっている、それよりもひどいのは、人が死んだりゆくえふめいのところもあった。

それから、ずっとこしからゆうがたごろニュースがあった、かたのことも出ていた、すごいことに、しんだひとが13人も出ていた。

九月十日に山津波

大川 よみこ

5時ごろ、けんしくんとこのおじちゃんがきて、いつかかしたカーバイトをもってきてくれて「水がえらなってきたさかはやくにげよい」といってくれたので、かぞくみんながひようだやににげたけど、ていでんだったから、けんし君とこのおじちゃんもってきてくれたカーバイトをつけたけど、お母さんがいつのまに弁当をつめたのかはしりませんでした。

そしてお父さんはさけをのんでいた、そのあとで、お母さんがつめた弁当をたべました。

ふとんをしいてみんなではなして、ひろみつ兄ちゃんのかっぱをきたまま入口の所でねていました。

お父さんは、くらくてせまくるしい所でねていました。

わたしとかえ姉ちゃんといっしょにねたけど、雨が強いのであまりねなかった。

そして、どこかのおじちゃんがきて「山がくずれたよ。」といったのでびっくりしました。

すこしたったら「ゴー」といってきたのでお母さんが「レインコートをきよい」と言ったので、わたしとかえ姉ちゃんといっしょにレインコートをきてくつをはいてすわってふるえていました。

あとからどこかのおじちゃんがきて「ちとせとじんせいがやられた。」といってくれました。

でもお父さんがかえってこないのもしんばいしました、けど、お父さんがかえってきたので、みんなでかたまっただけでした。

南部の集中豪雨

伊原 孝志

音楽の勉強のとちゅうで若林先生が、中奥の子どもは早くかえりなさいといったので、中奥の子どもたちはかえりました。

ぼくたちは、もんくばっかいていました。

野地先生がみんなかえりなさいといったので、ぼくたちはかえるよういをしました、そしてみんなでさよならをしました。

家へかえってみたら、まさひこに兄ちゃんがいました。

あとで、お母さんがこうばからかえってきたので、ぼくはおかあさんに「川の水があんなにふかくなっているよ」といったら、お母さんも見て

「ほんとうにすごいわね」といいました。

すこしして、たけゆきが下の道をきいよったもんで、ぼくはむかえにいきました。

そのときは下の道が川みたいでした。

家へかえってテレビをみました、だんだんやんでいったのでぼくは外へ出て水を見に行きました。

帰ってきたら停電していたので、電気がつくまで外であそんでいました。

家へかえったらとしみつくとこの電しんぼしらがゆれはじめたので、じっとみつめていたらどつと水と石が上からころがりこんできました。

たえちゃんとおじちゃんが、「土砂くずれやぞ。」

といったので、ぼくとまさひこ兄ちゃんと、たけゆきと、お母さんが上へにげていったらどろんこの人たちばっかたくさんいました。

まっくんとこのおじちゃんが、なきながらどこかへはしって行きました。

おかあさんが「さちこちゃんとかへいこらい。」といったので、ぼくたちはいった。

お母さんが「あそこにある水で体をあらいなさい。」と言ったので、あらいました。

どこぞのおじちゃんが「ここもあぶないさかにげろ。」と言ったので、また上のほうへ行ったらひでゆきくんとこのおばちゃんがぼくたちを見つけて、おじちゃんに「早く伊原さんたちをつれてきてやって下さい。」

と言ったのでおじちゃんが、ぼくたちをつれていってくれました。

ひでゆき君とこへ行くといっぱい人がいました、ひろみちゃんとひであき君もいました。

みんなしょんぼりしていました、ぼくたちが入ったらすぐやかましくなりました。

ひでゆきくんとこの???????? (字消え) おばちゃんがおにぎりをつくっていました。

ぼくはだんだんねむくなってきました、それを見てふとんをしいてくれました。

でもぼくは、ねむれませんでした、ぼくはじっとひでゆき君とこのてんじょうを見していました。

よそのおじちゃんがきて、「どろ水がきたらあぶないから気をつけて下さい。」と言ったのでぼくはびっくりしてふとんをかぶってしまいました、だんだんあせがでてきました。

そのつぎにきんほうとこのおじちゃんがきました、おかあさんが「わたしこの家は、だいじょうぶですか。」と聞いたら「だいじょうぶだよ。」といったのでぼくはほっとしました、ぼくは、さっきはねむれなかったのに今はねむれました。

よなかにたけゆきくんがはらをけりこんできたので、ぼくはまたおきました。

おかあさんがねまへきて「今よなかやさか早くねよな。」といったので、ぼくはねました。

集中豪雨

大川 ただかず

九月十日

5時間目の音楽をしていたら五年生の大川先生が、何か言いに来ました。

中おくの方はさき帰っていきました、そのほかの人も帰りました。

運動場に10cmぐらい水がたまっていました。

学校のよこの川もだいぶ水かさがふえていました、タケノ屋のほうの谷もあふれていました。

うちに帰って足をふいてあがりました、おとうさんと弟のよしとはブロックで自動車を作ってあそんでいました。

ぼくは、もっと水がたまってつなみのようにくるのではないかなあと思いました。

夕方になってきたら、だれかが、「たたみがながれてきたぞ。」といいました、ぼくはそのときびっくりしました。

そのとき電気はついていなかったの、小さいすにろうそくをたてて火をつけました。

ひでかず君はそのあかりで、ブロックであそんでいました。

ざしきで、ぼくとひでかず君とひでかず君のおにいさんと、しりとりをしました、ぼくはとちゅうでつまってしまったこともありました。

老人ホームへにげてきたひともいました。

ひでかず君は、ぼくに「ぼく、ねぞうがわりねんじゃ」といいました。

夜になったのでねました。

何人もねていたの、ぼくはせまくるしくてねられませんでした、そのときはせまくるしかだったので、ねられませんでした。

そのときはせまくるしかだったので、ぼくは山津波のことなど気にしてませんでした。

朝になってひでかず君は家へ帰って行きました。

一ばん下の女のみわちゃんとすみかは、うちの屋根にのぼってヘリコプターが青空をとんでいるのを見てあそんでいました。

ぼくはちょっとだけ屋根へのぼって行ってまわりを見まわしたら、「すごいなあ」と思いました、どこぞの山がくずれていて道のようにしていました、家がこわれそうな家もありました、そしておりにいきました。

おかあさんが、すみかが屋根にのぼっているの、で、「屋根にのぼんなあ」とすみかにおこりました。

ぼくはひでかず君とこは、どんなになっているか見に行きました、道がほこりだらけでした。

ぼくはタケノ屋の方はどんなになっているか見に行こうとすると、おかあさんが「あかん」といっておこってきました。

ぼくは、タケノ屋の方はどんなになっているか見たいと思いました。

二日後タケノ屋の方を見に行ったら、小さい谷のどろをとっていました、その谷でせんたくをしている人もいました。

集中豪雨

村田 ちほみ

あの日五時間目の音楽をしていたとき、若林先生が中奥の川があふないというたので、中奥の人はかえって東の人と西の人だけのこっていた。

もうすくなくなったので、東の人も西の人もかえそうかと若林先生がいうたのでかえりました。

私がかえったら、前の川の水があふれそうになってきました。

おかあさんは外にでないので川の水があふれそうになっているのを知らないでいたので教えてやったら、お母さんとおばあさんがふとんやら色々なものを上げていた。

その上げよるときひでかず君とこのおじさんがきて、「おじさんここににげてこいよ。」と言ったのでにげるよういをしました。

よういをしてからひでかず君とこへにげて行くとき、道が川のようにながれがはやかった。

ひでかず君とこにいてあそんでいたら、としか姉ちゃんがきて私と英人をつれていくとおかあさんにいったので三人でねえちゃんところへ行きました。

行くときちゅうどぶの中をみたら石や赤土がながれていました、道は水のながれがよくて、歩くと水がとぶのでつめたかったです。

としか姉ちゃんところについて、ごはんを食べてからふとんにはいって本をよんでいたから、「ゴーゴー。」というきたので外にでてみたら、「山つなみだ。」といったので、また下のうちへにげました。

わたしは、ぶるぶるふるえながらにげました、そしてくらくらしたのでみんなが中学校にげよかっと言っていました。

そして、しょうぼうだんにつれてきてもらいました、そしたら中学校の行くかいだんのところまできたらうちがびしゃがれていた。

そしてよがあげたのでうちのかえりました。

うちにかえって、うちは水どれだけきたの、ときいたら一m半とゆうたのでびっくりしました。

その日ぐずれたところをみに行ったら、じえいたいの人が生きうめになった人をスコ

ップでほっていました。

わたしの知っているあやこ姉ちゃんも死にました。

あやこ姉ちゃんの思い出は、なつやすみにおよぎにいったこと、ふくをかいに行ったことが心にのこっている。

あやこ姉ちゃんは大きい石の下に姉ちゃんとおばちゃんと手をつないで死んでいた、あやこ姉ちゃんは、足をびしゃがれていたけどかおは何もけがをしていなかった。

その姉ちゃんとおばちゃんを見ているとかわいそうでなけてきそうでした。

この集中豪雨は二百年前もあったそうです。

こわかった一日

森岡 たかもり

雨がものすごくふった。

ぼくは学校がはやくおわったので、よるこんでいた。

かえるとちゅうよこの川があふれてくるようだった、そして、にわまで水がどろどろはいつてきた。

そのときはまだゆかしたただったけど、こわくなってはんごろやへにげた。

しばらくしてお父さんがきた、お父さんは

「水はたたみの上まできた。」と言った。

すこし時間がたった。

かみなりがなったような音がして、中学校のよこのところがくずれてきた。

お婆さんたちがにげてきてないでいた、その人たちは

「こどもがおらんよう。」

「とうちゃんがおらんよう。」

「ばあちゃんがおらんよう。」と、ないでいた。

それをきいてお母さんが、ふうとしてたおれていきそうになった。

ぼくはしらんかおをしていたけど、本当はとてもこわかった。

お父さんが「ここらへんもあぶないから」と上のえんすけやへにげた。

ぼくはしぬとおもった。

山津波がこんなにおそろしいとは思わなんだ、こわかった。

一日がおわった、その日ははれていました、家へ行ったらどろにかこまれてまるでぶたごやのようだった。

しんだ人がたくさんいて、とってもかわいそうだった、今考えてみると、賀田の山をかえたひとがわるいんだと思う。

それから、どこに行くにもちゅういして歩いている。

あの日はおそろしかった。

九月十日は、わすれることができない。

大雨

上中 やすひさ

ぼくたちが音楽をしていたら若林先生が来て、中奥の水が多くなってきたから中奥の人はみんなかえるよういをしなさいと言った。

中奥の人がかえたあとからぼくたちもかえた。

フードセンターのよこへ行ったらお父さんが妹をむかえに行きよった。

ぼくは家にかえってテレビを見ていたらでんきがきえた、

家に水が入りそうになったときごはんをたべて中学校へにげた、にげるとき道は水でいっぱいだった。

中学校のまどからみんながみいよったもんでみたら、家がなかったのでびっくりした。

そのときお母さんはおわせに行っていた。

ぼくはおそろしかったもんで十時ごろまでねなかった。

つぎのひ家に行ってみたらゆか上まで水がきてたたみがういていた、にわとりもしんでいた、家のよこにながれていた、そこにかえるがいた。

三重県南部の集中豪雨

柴田 早苗

若林先生が、「中奥の子は、水が出てきたからすぐかえりなさい。」

と言ったので、私たち中奥は、いそいでランドセルにどうぐをしまつて、私と、ちいちゃんと、とっちゃんとくつをはいて出たら、ゆうちゃんと、とんまさ君は、小田さんとこの車にのっていた。

すこしして門を出たら、かつとし先生の車が水をかけて走っていた。

おこだに川を見たら、水はにごつてどんどこ流れていたの、私ち三人は走つた。

そしてせと君とこにきたら、せと君とこは道がすこしつかつていた。

こんど小田さんとこにきたら、水道の東がわがすこしくずれていた、そこは少ししてからまたくずれてきた。

家にかえつたら、お父さんがいて、お父さんは昼ごはんをたべていました、そしてあとでゆうちゃんに「にげるよういしとけよ。」と言つたので、私とゆうちゃんはにげるよういをしました。

あとで、かっぱをきていたらお母さんがきて「じいちゃんとはやく中学校へにげよ。」と言ったので、私はじいちゃんの荷物をもってにげた。

中学校にいて、すこしたってからあけてもらった。

そして中にはいて、ゆうがもっていた荷物の中のまんが本をみていたら、せとくとまことくんがあとからやってきた。

そしてあがってきて、あとですこし人がにげてきた。

そして下におりていったら野地先生がきていたのでとっちゃんとすこし下にて先生がトンネルを歩いて家へかえってから、二階へあがっていったが先生がトンネルをとおって行ってすこしたってからごはんを食べていたら、中三のかずさんが、

「いえがくずれるぞ。」とやってきたので、わたしたちは、ごはんを食べさしにしてみんながまどから外をのぞいたら、下までぐちゃけていた。

そこにあった家の木や、山から流れて来た石がたくさんあった、わたしはそれをみてぜんめつだと思った。

それがぐちゃけてからすこし人がにげてきた、あとでけが人や、どろまみれになった人もたくさん来た、足をうってちが出ているひと、むねをうっている人、おばあさんらもきた。

こんな目にあった人はほんとうにかわいそうだと思う。

夜十一時ごろねて、三時ごろおきてまたねて、こんどは五時におきて、たいくつなので、とっちゃんらとすこしあそんだ。

夜があけてから家にかえるとき、まだ奥の道は湖のように一面水につかって、めちゃくちゃになっている、小川のところをとおって家にかえった。

あれがあってから、夜外へ一人で出るのもこわい。

びっくりした 九月十日

小川 耕太朗

五時間目の音楽をしていたとき若林先生が来て、「中奥の子は早く帰れ、大水が出たよってに。」と言ってきたので帰って行ってしまった、そのため人数がへったので、ぼくたちも帰った。

ちょうどお母さんがむかえに来ていたのでいっしょに帰った。

帰ってからも雨はいつそう強くふるし、水はもうすこしで床下までくるので、大事な物はつくえの上へ置いてあそんでいたら、お父さんが、「いつごはんが食べれやんようなるかわからんよってごはんを食べよ。」と言ったので、ごはんを食べました。

食べてから前の道を見たら木やどろがながれてきた、それといっしょにしょうぼうだんの人が来て、学校の横の川がはんらんして、水がこっちへ来ていますから早くに

げて下さい。」と言ってきたので、お父さんにおぶさって家の間を通り、大通りを通っていぼうへにげた、そしてその近くにある倉庫の前になげた。

お父さんは、えいじおじちゃんをよびにいった。

すこしたったからたけのりが「さむいよう。」と言ってきたので、ぼくは服をぬいできせてやった。

五分くらいたってから、えいじおじちゃんたちがやってきた、そして「ここのドアあかんのか〜。」と言ったので、ぼくが「わからんよってやってみよらい。」そういつてあけて中にはいつて話をしていた、するとみんなが「さむい、さむい。」と言うので、お父さんとながとし君とこへにげた。

そこでふろにはいつてあそんでいたとき、ふとにわの方を見ると人が立っていた、おばあさんだった。

知らない人だったのでお母さんをよんできた、お母さんのよく知っている人だった。

お母さんは、その人を家の中へ入れて話をしていた、ぼくは、ぜんぜんいみがわからないのでまたあそびをした、あそびをしていてだいふおそくなったのでねた。

よく日、家を見に行ったらどろだらけだった。

これだったら机の上もどろどろだろうと思っていたらつかっていなかったのではとしました。

なぜかと言うと、その中にきつてをいれていたからだと思います。

もう一つよい事があった、それは、九月二十日から中学校でべんきょうができるようになってよかったと言う事です。